＜たまねぎ＞

・アグリメールで配信している、年間の主な作業を掲載しています。（気候条件等で前後することがあります。生育状況に応じて管理してください。）
・病害虫の発生は栽培ほ場の状況を良く観察し、毎月の病害虫発生情報は http://www.jppn.ne.jp/osaka/index.html を参照してください。
・防除薬剤は『大阪府農作物病害虫防除指針http://www.jppn.ne.jp/osaka/shishin/body/mokuji.html 』を参照してください。

月	１月			２月			３月			４月			５月－７月			８月			９月			10月			11月			12月		
旬	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
露地					病害虫防除						収穫							栽培準備	は種	育苗			定植	かん水				追肥		
管理作業				【病害虫防除】 ▼2月から5月に雨が多いと、べと病、白色疫病などの病害が発生しやすくなります。ほ場を見回り、葉が曲がる、下垂する、黄化、白化等の症状があれば、広がる前に薬剤による防除を行いましょう。 ▼肥料の過用を避け、排水を良くする、発病初期に発病株を速やかにほ場外に持ち出して処分する、収穫時に被害葉を集めてほ場外に持ち出して処分する等が有効な対策です。						【収穫】 ▼地上部の葉が7、8割倒れた頃の晴れた日に行います。 ▼吊り玉貯蔵では３-５日晴天が続いた後に株を抜き取り、１日程度うねの上で乾燥させます。 ▼乾燥後、土を十分に落とし数個から10個程度をひもで束ね、風通の良い軒下などに吊します。 ▼コンテナ等に詰めて一時保管する場合は、十分に乾燥させてから首部を長めに残して葉を切り、詰めすぎないようにして、風通しの良い所に間隔を空けて置きましょう。						【栽培準備】 ▼品種の早晩生により作付時期や貯蔵性などが異なります。 ▼適期に種をまかないと春先に花が咲いたり、分球、収量減を招いたりするので注意しましょう。 ▼「極早生種」のは種適期は９月10日頃です。４月中旬から収穫できますが、比較的小玉で貯蔵性はありません。 ▼「早生種」のは種適期は９月中旬です。４月下旬から収穫でき収量も増えますが、貯蔵性のない品種が大半です。 ▼「中晩生種」のは種適期は９月後半です。５月から６月中旬の収穫で、貯蔵性のある品種が多く大玉種もあります。 ▼品種に応じた栽培計画を立てましょう。	【は種】 ▼苗床は本田10ａに対し50平方メートル必要です。排水の良い所を選びましょう。 ▼種をまく2週間前に、苦土石灰を50平方メートル当たり5kg、数日前に普通化成(8－8－8) 8kgを元肥として施し、幅120cmのうねを立てます。 ▼種子は本田10ａ当たり4デシリットル用意します。種子の寿命は短いので購入した種子はその年に使い切ります。 ▼先に十分かん水した後、厚まきにならないようにばらまきし、種子が隠れる程度に覆土します。 ▼くわで土を押え、堆肥、切りわらなどで軽く覆うか、発芽するまで寒冷紗等で被覆します。 【育苗】 ▼発芽した苗は本葉２枚頃までは乾燥に弱いため、気温が低下するまでは、晴天の日の夕方にかん水しましょう。 ▼雑草が発生する場合は、手で除草します。 ▼追肥は苗の状態を見ながら行います。追肥量は普通化成(8－8－8)で50平方メートル当たり２．５kgを限度とします。多すぎると病害の原因になります。 ▼苗の葉数が３枚、株元の太さが４-５ミリになれば植え付けの適期です。 ▼大苗になると冬の低温の影響を受けやすく、春先に花が咲くおそれがありますので注意しましょう。			【定植】 ▼植え付け時期は、極早生種・早生種は10月下旬、中晩生種は11月上旬から下旬です。それぞれの品種に適した時期に行いましょう。 ▼元肥は、普通化成(8－8－8)を10ａ当たり50kg施用します。 ▼植え付け前日に育苗床を十分かん水して、当日根を切らずに苗採りできるようにしておきましょう。 ▼大きすぎる苗や小さな苗は取り除き、深植えにならないように、株間10-12cm、条間20-25cm、深さ２－３cmに植え付けます。その際、根が地表に出ないよう注意し、乾燥防止のため株元を軽く押さえます。 【かん水】 ▼植え付け直後にかん水し、乾燥・地温低下防止のため、稲わらや堆肥などをおきます。 ▼その後、乾燥が激しい場合にうね間に軽く湿らせる程度のかん水をします。				【追肥】 ▼１回目は12月中旬に、普通化成(8－8－8)を10ａ当たり70kg、条間に施します。 ▼２回目は、極早生種・早生種は１月中下旬に、中晩生種は２月中下旬に、土が適当に湿っている時に、普通化成(8－8－8)を10ａ当たり100kg施します。 ▼追肥の量や時期を間違えると、抽苔（ちゅうだい：花芽をもった茎が伸びること）、貯蔵中の萌芽、減収、病害などの原因になるので注意しましょう。 ▼追肥の後に除草を兼ねて耕すと、肥大促進や品質向上に役立ちます。たまねぎの根を切らないよう、うねの側面を軽く耕しましょう。		